１１月号　アグリワークポイント

『水稲』

収穫後の水田管理

収穫も終わりホッと一息ですが、収穫作業終了後は、作業機械の整備・点検、畦畔や圃場環境の整備を進めるとともに、次年度に向けて本年の稲作の反省検討を行いましょう。品種構成、気象変動対策、病害虫防除対策などを確認し、良質・良食味米の安定生産と売れる米づくりに取り組むための土づくりを行う時期です。また、冬場の適切な耕耘で、厄介なジャンボタニシの密度を少なくしましょう。

・農業機械施設の整備

取扱説明書に従って点検整備を必ず行い、農業機械を格納しましょう。

・品種構成の点検と種子の手当て

本年の作柄や品質・価格の実態を評価し、来年の品種構成を決めて種子や苗のＪＡ等への注文状況も再確認しておきましょう。

・畦畔の補修、田面の均平、排水

コンバイン等の作業で田面の凹凸が大きくなった場合は、秋のうちに均平作業を行っておきます。暗きょ排水施設などの点検もします。また、排水の悪いところでは明きょを掘り、停滞水を排除します。特に粘質田では秋から翌春にかけて、圃場の乾燥を心掛けます。

・気象に左右されにくい栽培管理

・病害虫防除対策の徹底

《土づくりと稲わらの利用》

水稲が吸収するチッソの約半分は地力によって供給されます。地力チッソの多少が水稲の生育に及ぼす影響は大きく、特に本年の気象で砂質田では、粒が細く、整粒が少なかったため、堆肥や稲わらなどの有機物を投入し地力を高めましょう。

土づくりの方法として手軽に取り組むことができるのが、収穫後の稲わらのすき込みです。稲わらなどの有機物は土壌中の腐植を増やし、土壌を軟らかくするなど、化学肥料にはできない物理性の改善や、生育全般にわたって緩やかに養分の供給を行うなどの働きをします。また、稲わらと合わせ**「とれ太郎」**などの珪酸質、鉄分を含んだ肥料を投入することも有効です。

珪酸は収穫された籾と一緒に圃場外へ持ち出されていきます。珪酸は水稲のなかに１０％以上も含まれ、玄米１００㎏を生産するのに１０～１５㎏の珪酸が必要といわれています。珪酸質肥料の効果は、根腐れを防止したり、茎葉を丈夫にして倒伏や病害虫に対する抵抗力を高めます。また、茎葉が堅くなることで止葉の受光態勢が良好となり、品質、収量の向上も期待できます。

鉄分は水田土壌の還元で発生する硫化水素から根の障害を防ぐ役割を担っています。生育後期まで根の活力を保つことに役立つため秋落ちを防ぎ、品質、収量の向上につながります。

①稲わらの放置は水田土壌の乾燥を妨げ、春すき込みは初期生育が不良となることがあります。さらに、生育後期に土壌窒素が発現し、米の蛋白質含有率が高くなるため、稲わらは早めに分解させましょう。
②稲わらはケイ酸資材を散布して早めにすき込んで腐熟を促進させましょう。土改材の施用時期は、水稲収穫後から田植えまでの間のいつでも良いですが全面散布後、作土と良く混和させることが大切です。
③稲わらは畜産農家と連携し、家畜粗飼料や敷料として有効利用を図りましょう。

《ジャンボタニシの駆除》

スクミノン粒剤の普及で被害は減ってはいるものの、発生地域は広がっています。稲藁腐熟促進も兼ねて**石灰窒素**１０～１５kg(１０ａ)を施用します。ジャンボタニシは貝殻が薄く傷つきやすいので、ロータリー耕で貝を破壊し、密度を減らします。できるだけ土の硬い時期に、作業速度を落とし、ロータリー回転数をあげて、一気に耕耘することで殺貝効果が高くなります。さらに用水路も主な越冬場所なので、冬期間は水路をできるだけ落水、乾燥させ、清掃しておくことも駆除に役立ちます。

営農企画課　原田